# アジア・キリス教研究に向けて（２）
## ―方法と適用―

芦名定道

### ４　海老名－植村のキリスト論論争の場合

これまで、我々はアジア・キリスト教思想研究の新しい可能性に向けて、アジアを歴史概念として捉えた上で、比較という視点、相関という方法の２点について考察を行ってきた。本章では、こうして得られた研究の視点と方法とを、実際の事例に適応することを試みたい ── この方法論の妥当性については、続く「５　展望」において具体的に検討することにする（今回は省略）──。そのために取り上げられるのは、明治のキリスト教思想史で有名な海老名弾正と植村正久とのキリスト論をめぐる論争である。まず、論争をその背景から結末に至るまで概観し、次にこの論争について、キリスト教思想史一般の中で意味を解釈し､続いて論争を近代日本と日本キリスト教の歴史的状況という文脈に位置づけ、最後に、このキリスト論論争の意義を、状況とメッセージの相関という枠組みにおいて評価してみたい。

海老名－植村論争は、1901 年から翌年にかけて、それぞれが主宰する雑誌を舞台に集中的に行われた論争であり、最終的には二人の間の論争を超えて、様々な人々がこの論争に参加することになる。この経過は、発端（あるいは背景)、論争１、論争２、論争の波及、結末という仕方でたどることが可能であり、以下簡単に概観してみよう。

#### （1）　論争のプロセス

まず、論争のプロセスをいくつかの段階に区分し、関連する文献を合わせて示すことにしよう。[(1)]

①発端・背景

１．日本福音同盟会（1878/日本基督教信徒大親睦会、1885/日本基督教徒同盟会）の大挙伝道(1901-1902)

２．植村正久「福音同盟会と大挙伝道」(1901.9.11『福音新報』324号）

②論争１

３．海老名弾正「福音新報記者に與ふるの書」(1901.10.1　『新人』第二巻第三号)

４．植村正久「海老名弾正君に答ふ」(1901.10.9　『福音新報』328号）

５．海老名弾正「植村氏の答書を読む」(1901.11.1　『新人』第二巻第四号）

６．植村正久「挑戦者の逃亡」(1901. 11.6 『福音新報』332号）

③論争２

７．海老名弾正「再ひ福音新報記者に與ふ」(1901.12.1『新人』第二巻第五号）

８．植村正久「海老名弾正氏の説を読む」(1901.12.11『福音新報』337号）

④論争から思想形成へ ── 海老名と植村の三位一体論・キリスト論 ──

９．海老名弾正「三位一体の教義と予が宗教的意識」（1902.1.1 『新人』第二巻第六号）

10. 植村正久「基督の其の事業」（1902.1.29-7.24『福音新報』）

11. 海老名弾正「諸批判を読んで再び予が基督観を明にす」
（1902.4.1『新人』第二巻第九号）

12. 海老名弾正『基督教本義』（日高有隣堂、1903年）

⑤論争とその波及[2]

13. 福音新報社説「海老名弾正氏の告白を紹介す」（1902.1.8『福音新報』341号）

14. 新人社説「福音新報の紹介文を読む」（1902.2.1『新人』第二巻第七号）

15. 福音新報社説「彼我相違の点を明らかにす」（1902.1.15『福音新報』342号）

16. 海老名弾正「諸批判を読んで再び予が基督観を明にす」
（1902.4.1『新人』第二巻第九号）

⑥一つの結末

17. 日本福音同盟会第十二回大会（1902 年４月 12 日から 14 日、東京青年会館）
「本同盟が福音主義と認めるものは聖書を以て信仰と、行為の完全なる規範とし、人と其の救ひのために世に降り玉へる主イエスキリストを神と信ずるものを言ふ」の決議案。出席議員 165 名の中、反対者６名、賛成者 118 名で、可決。

18. 「福音同盟会の決議」（1902.4.23 『福音新報』356号）
「日本福音同盟会は斯くの如く大多数を以て福音主義を明白に宣言せり。」

この論争の分析に入る前に、以上の区分にしたがって論争を概観し、その要点を確認しておきたい。まず、この論争は、それに先だつ新神学問題を背景とし、日本福音同盟会の大挙伝道をめぐる植村正久の論文 ── 信仰告白の一致がない福音同盟会が伝道の担い手たり得るのかという問題提起 ── をその発端としている（①２）。そして論争は、この植村正久の論文中の、「余輩は神人となりて世に下り、十字架に死して人の罪を贖ひたるを信ず。而して余輩の信ずる耶蘇基督は活ける神のひとり子にして、人類の祈りを受け、礼拝を受くべきものなり。基督は人類より此の上無き崇敬と愛とを受くべきものなり」の文章に対する海老名の質問から開始された（②３）。質問は、「神人となり」「世に下り」の二点に向けられている。最初の論争１では、基本的な論点は示されているものの、二人とも互いの出方を伺い ── ＜植村＞「今更の様に難題がましく御質問あるが了解致し兼ね候」、むしろ「無信の哲学生」のような口ぶりに対しては、「不審なるは貴殿の立場にて候」、＜海老名＞「恰も洗礼志願者の入会試験でもせらるるが如き口調」 ──、自らの見解を一方的に述べるだけで、論争としては不毛なものであったと言わざるを得ない。[3] 論争１は、海老名が自分の質問に正面から答えようとしない植村に対して、実質的な論争にならないこうしたやりとりの無益さを述べることによって ──「ああ予は最早多くをいふまい、しかも遂に此等意外の言を以て今回の局を結ばねばならぬに至つたことを深く限りなく遺憾とするものである」 ──、終結する。

しかしこれに対して、植村が「挑戦者の逃亡」（②６）という文章において、「海老名

氏は神を父なりと信ぜらる。其の内容如何。神は永遠無始に父なりしか。」「公開書を発して挑戦者の地位に立たれたる氏は、之に答ふるの義務無きか。余輩は福音新報の読者諸氏と共に、氏の答弁に接せんことを待ち望むものなり。」と、述べることによって、論争が再開されることになる（③）。この論争でも、二人の議論はかみ合ったものであるとは言えないが、それぞれ、自説の論拠となる欧米神学者の説に言及するなど、このキリスト論論争がキリスト教思想史においてどのように位置づけられるかについて、かなりの情報が提示されている。何よりも、この論争を受けた両者が、「三位一体の教義と予が宗教的意識」（海老名弾正）、「基督の其の事業」（植村正久）を著し、それぞれの三位一体論とキリスト論に関する見解を公にしたことは（④）、この時期の日本のキリスト教神学の水準を知る上で有益であり、こうした中で、論争は二人のやりとりを超えて波及することになる（⑤）。そして半年の間、集中的に行われたキリスト論論争も、福音同盟会の決議で植村の立場が支持されたことにより、つまり、論争の発端になった植村の問題提起が、「本同盟が福音主義と認めるものは聖書を以て信仰と、行為の完全なる規範とし、人と其の救ひのために世に降り玉へる主イエスキリストを神と信ずるものを言ふ」というように植村の主張の線で決着したことによって、一応の終結を見ることになる（⑥）。

次に、以上の概観を念頭に置きつつ、このキリスト論論争の分析を行ってみたい。ここでは、前章で示した「状況とメッセージの相関」という枠組みにしたがって、まず、「メッセージ」（キリスト教の歴史的連関）から、次に「状況」（日本あるいは日本のキリスト教の歴史的連関）から、それぞれ考察を行い、最後に「相関」という観点から、海老名－植村論争を評価してみたい。

### （２）近代キリスト教の文脈での論争の意味－メッセージの連関から－

アジア・キリスト教思想研究を「状況とメッセージの相関」という枠組みで行う場合、研究対象は、キリスト教とアジアという二つの歴史的連関で分析されることになる。まず、海老名と植村のキリスト論をめぐる論争を、キリスト教、とくにキリスト教思想の歴史的連関に位置づけて見たい。メッセージの側から考察を開始するのは、海老名と植村の両者が行う議論では、状況の連関自体が主題的に明示されてはいないからである。議論自体は近代キリスト教思想史の中で展開されており、この論争をキリスト教思想における類似の論争と比較することは困難ではない。

近代のキリスト教（近代化した社会におけるキリスト教）は、世界のどの地域においても、「近代」という独特の歴史的状況に対していかに適応するのかという共通の課題（普遍的な問い）に直面してきた。海老名－植村の論争は、こうした近代キリスト教の直面した問題状況を端的に反映しており、欧米の神学論争 ── たとえば、ハルナックとバルトという二人の代表的なキリスト教思想家の間で行われた自由主義神学と弁証法神学との論争[(4)] ── と明確な平行関係を有している。ここでは、二つの論点に絞って分析を行ってみたい。

第一の論点は、近代主義・聖書学と伝統的神学・信仰との関係性をめぐるものである。すでに述べたように、このキリスト論論争のはじまりは、海老名弾正が「福音新報記者に與ふるの書」（②３）において、植村の信仰内容（「神、人となり」「世に下り」）について論争を挑んだことであったが、その際に三位一体の三つのペルソナの関係について、哲

学的あるいは論理的にいかに考え説明するのかという論点（教義形成に関わる教義史的問題）と聖書や信仰告白文などの神話論的語り方を字義通り信仰するのかという論点（聖書解釈学的問題）が提出されていた。これらは、古代からキリスト教思想において論争されてきた問題である。したがって、植村正久が「海老名弾正君に答ふ」（②４）において、自らの信仰は「歴史的の信仰」「基督教徒の歴史的に継承し来れる信仰」であり、その論理的哲学的な問題はすでに十分議論を経たものあって、「御質問は無用」であると応じているのも、それ自体理解できることである。つまり、この論争はキリスト教思想におけるまさに争点としてすでに多くの議論があり、[5] 確かに、いまさらどうしていかなる立場からこの問題を持ち出す必要があるのかと、植村が海老名の意図を不審に思うのも当然と言えるであろう。しかし、これに対して、海老名は直ちに、「植村氏の答書を読む」（②５）で、「単に歴史的に継承し来たれる信仰という言葉を以て一概に言い去ることは出来まい」、「彼の欧州の宗教改革といひ、諸教派の分立勃興といひ、見来ればこれ基督教信仰内容の発展に他ならない」と述べ、近代の自由主義神学あるいは歴史主義の立場 ── これは近代的合理主義の立場とも合致する ── から、近代の学問的な水準でのキリスト教思想の批判的検討の必要性を要求している。つまり、信仰告白の定式は、特定の歴史的状況に規定されたものであり、教義は永遠の真理ではなく、むしろ歴史的発展過程の中で更新されねばならない、これが海老名の見解であって、学問的水準において意見を表明するというのであれば、こうした点を当然考慮し自らの態度を鮮明にすべきであると主張しているのである。こうした見解は、「再ひ福音新報記者に與ふ」（③７）などでも繰り返されており、海老名の基本的立場と言えよう。

> 「新報記者は何を以て古代の哲学思想の産み出せるかかる神話的教説を承認せらるるのであるか。」「はたカルビン、ルーテル、ウエスレー等の諸賢が信仰したからといつて、之に盲従和同せらるるのであろうか。記者はかく信ずるのを歴史的継承とせられるやうだ。史的継承は吾人も大に重んずる所であるけいれども、古代の形骸を其儘に伝ふるのは抑も歴史を滅却したものではないか。歴史といふことは文字其物よりして開展進化を意味して居る。」

海老名と植村の主張は、どこに論争の場を設定するのかという問題に関わっている。海老名は近代聖書学の水準での批判的討論を要求し、植村は伝統的信仰との連続性・継承の仕方という点での討論を求め、それぞれ相手に対して、態度の鮮明化を要求しているのである。もちろん、この討論の場の設定に関わる近代的な歴史主義的合理主義と伝統的な歴史的信仰 ── 神学的自由主義と神学的実定主義 ── は、あれかこれかの関係ではなく、むしろ、近代の神学思想はこの両者の様々な組み合わせとバランスの上に存在している。海老名自身近代聖書学の批判的合理主義的な立場に完全に徹底しているわけではなく、また植村も決して原理主義を表明しているわけではない。実際、この論争が他の人々を巻き込んで展開する中、より徹底した聖書学的立場から海老名の見解の不十分さが批判されることになった。また植村に対しても、より保守的立場からの批判がなされることは十分にあり得たことと思われる。確認すべきは、近代のキリスト教が置かれた思想的状況が、この論争自体を規定しているということ、また現代に至るまでその決着はつけられていないと

いう点である。[6] つまり、社会の近代化過程の内にキリスト教がもたらされたことが、伝統的信仰内容と近代的合理精神との関わりという近代のキリスト教にとって普遍的な問題を、明治日本においても起こるべくして引き起こしたと言うべきなのである。

聖書解釈に関わる典型的なケースを挙げることによって、以上の第一の論点をさらに明確にしておこう。植村は、「海老名弾正氏の告白を紹介す」（⑤13）において、「ビィデルマン、フライデレル等は之に同意すれども、ヴァイス、ロイス、及びドヴルネル等多数の学者は、此の一節の拠りて上天の標準的人格説かパウロの思想なりしと推測するを非難せり」として、自らの立場のキリスト教思想史的あるいは聖書学的な裏付けを示唆しつつ ── 聖書テキストを典拠とすること ──、キリストが礼拝と祈りの対象、つまり神であることは、キリストの遍在性として明示されていると論じる。

「パウロは其の書簡に於て神格を認めたりと見做さざるを可らざる多くの語を記せり。ピリピ書第二章の如き其の最も著るき一つとす。約翰をはじめ当時の基督信徒が基督を礼拝し、之に神事し、之に祈りを為せるは、紛れもなき事実なり。基督か文字的に自ら神なりと公言せられしことなきを喋々するは文を以て意を害するものなり。形式に泥みて精神を忘却せりと云はざるべからず。基督の言を適当に解釈すれば、之を神と見る外なきもの甚だ多し」「彼は世界の審判者なりと称し、二三人集れるところには我も共に在んとて其の遍在を宣言し」。

以上に対して、海老名は「福音新報の紹介文を読む」（⑤14）で、ヴァイス、ドルチルら多数が海老名の説に反対としているとの植村の反論を確認した上で、ビーデルマン、プライデルだけでなく、ワイスツアツケル、ホルツマンも、同様な見解であるとして、自らの立場を補強し、上に引用の植村の議論に対して、論点を対応させつつ、次のように反論している。

「新報記者はパウロがキリストの神たるを認めし、最も著しき証拠の一として、腓立書第二章を挙げらるるピリピ書が果してパウロの手に成るや否やは、大家の疑を容れし所、よし之をパウロ書とするも、吾人の標準として掲げられたるキリストは、決して第二位の神を指すものにあらず、これ即ち標準的人格をいへるなり。さればこそ其為すところ吾人の標準たるをうるなれ」、「記者又曰く、キリストが文字的に、自ら神なりと公言せられしことなきを喋々するは、之を以て意を害するものなり、形式に泥みて精神を没却せるものなりと。言固に然り。単に其一事を以て、其神にあらざるの証明とするは、固より満足の議論にあらず。記者等の議論常に聖書記載の文句を楯に取るが故に、吾人亦これを以て槍矢となすのみ。しかり而して、キリスト御自身が自らを神と呼び給はざりしのみならず、其十二弟子等も一回として神の名を之に加へしことなし」、「新報記者は、二三人の集まれる所には吾れも共にあらん、とのキリストの言を引き来つて、其遍在の証となさんとす。片言隻語にのみ其証拠を求むとは、正に斯の如きをいふべきにあらずや。イエスは此世を去り給ふに當つて、弟子にあらざる後の事を託し給ひしにあらざるか。我れ再び来らんと言はれしにあらざるか。其去るといひ其来るといふ、如何でか遍在を證せん。……吾が名に由つてといふ句にこそ意味は籠るなれ。」

こうした論争は、聖書学的な問いのレベルにおいて展開されたものであって、海老名と植村の論争がいかなる場においてなされているのかをよく示している。

次に、論争の第二の論点である個人の宗教経験と神学との関わりへと考察を進めよう。この論点は、論争の過程で公にされた海老名の「三位一体の教義と予が宗教的意識」（④９）における「神子たるの意識」「父子有親の意識」の議論に関わっている。まず、海老名から引用してみよう。

「予は基督信者となつて二個の著しき実験をなした。第一の実験は基督信者となつた其瞬間の時であつた。何であつたかといふと、天地の神が我君主であるといふことを感得したことである。実に予は神に降参して其臣僕となつたので、此時より予を支配するものは神であつて、予は主我主義を去つて主神主義の人となつた」、「此時余は始めて最も聖なるゲツセマネーの主祷を実験することを得た。其時恰も忽焉として予が心底に発生したるものは則神は我父にして我れは其愛子であるといふ意識であつた。爾後二十餘年余が宗教的意識は此神子たるの意識であつて、実に余が宗教思想の源泉となつたのである。余は此二個の実験と意識とを以て耶蘇キリストの意識を窺ひ見た。是に於て天地の主なる父よと號呼し給ふた耶蘇基督の宗教的意識に限りなきの同情と同感とを献することが出来て」、「基督には彼れと神と父子有親の意識があつたことは、予は毫も疑ふことが出来ない」

海老名は、自らの実験（宗教経験）である「神子たる意識」をその宗教思想の源泉とし、そこにキリスト論を根拠づけているが、まさにこの点こそが、その後の論争の争点の一つとなり、また海老名に対して多くの批判がなされた部分なのである。たとえば、植村は次のように問題点を指摘している（「海老名弾正氏の告白を紹介す」⑤13）。

「神と本体を同ふすと云ひ、形而上的父子有親の関係ありと唱へ、或ひは人に対して神なりと説くの意義果して如何ん。余輩の此の点に於て新人記者が思想の脈絡不明了にして、前後の照応甚だ漠然たるを憾みとす。」「基督の神性を認むと称して、其の実神と人とを全く同一なるものと做す。」「海老名氏の基督論は其の第三種に属す。其の弊や万有神教に陥り、識らず識らずして罪を無視して、仏教的の信念を抱くものとなる。」

つまり、植村の批判は、海老名の議論の論理的な問題点（形而上的父子有親などといった表現について、「新人記者が思想の脈絡不明了にして、前後の照応甚だ漠然たる」）を的確に突いており、また海老名の強調するように宗教意識・宗教経験の立場が、キリスト教の歴史的固有性を損ない万有神教（汎神論）に陥る、とくに罪理解に関して問題的である点に向けられている。[7] これに対して海老名は、むしろキリスト教とは汎神教的な神と人との一体性の経験を本来その神髄とするものであって、この神髄を忘れた信条主義に陥った点にこそ問題があると反論する（「福音新報の紹介文を読む」⑤14）。すなわち、

「判定せられたり、吾人の信念は万有神教的信念なりと。記者は流石に吾人の信仰を以

て、万有神教の信念なりとはいはれざりき。しかも其的とは何ぞ。これ吾人が神人一体を主張する故に、吾人を以て非基督教的なりと言はるるなきか。これについては尚弁すべき所多かれど、今は基督教が実に汎神教的信念なることを一言して措かん。」
エペソ書やヨハネ１５章は、「キリストを神と一体たる如く、キリスト信者と神と一体たりうることを、断言したまひしものならずや。」
「基督教徒はキリストを信ず、キリストを信ずとは、他なし、其人格其精神に結合するにあり。即ちこれと同感同情となり、之れを一致融合し、終に彼を以て、我に化し、我を以て彼れに化するにあり」、「人性に具はる尊栄を喜び、人類の眞なる姿と大なる可能性と、其無限の未来を仰慕する所以なり」、「ああ当今の牧師伝道師、この神髄を忘れ、この遺志を忘れ、徒らに初代基督教が採用せし、哲学の形式を弁護宣伝せんとせば、基督教の生命と真理とは、何れの日が我国に樹立しえん。吾人は飽く迄かの信条主義を打破せざるべからず。」

海老名のキリスト教思想は、教義や信条の歴史的定式に無批判に依拠するのではなく、むしろ、イエス自身の宗教経験（キリストの宗教、キリスト自らの宗教）に帰り、それを基準としてキリスト教思想史を解釈し、また自分自身の宗教経験において実験的に理解するという立場に立つものであり、それは近代のキリスト教における思想傾向の一つと言うべきものである ── トレルチの言うスピリチュアリスムス ──。こうした傾向は、シュライアーマッハーにおいて明瞭に確認可能であり、また自由主義神学においてその展開をたどることができるが、バルトらの弁証法神学が批判したのは、この教義の源泉としての宗教経験、宗教意識という立場だったのであり、とくにこのような立場がキリスト理解と罪理解において欠陥を持つ点が問題とされた。こうしたバルトの宗教経験の神学への批判は、植村が行った海老名批判と共通の地盤に立ったものであって、罪理解の問題点を指摘する点でも一致している。したがって、海老名－植村の論争は、この第二の論点に関しても、近代キリスト教思想の歴史的連関の内に位置しているのであり、ここにおいて、先の論点の場合と同様に、近代のキリスト教の普遍的な問題状況を確認することができるのである。
なお、罪理解に対する植村以外からもなされた批判に対して、海老名自身は、神子のたる意識が決して罪を軽視するのではなく、むしろそれが深刻な罪理解を前提にしているという点を次のように論じている（「諸批判を読んで再び予が基督観を明にす」⑤16）。しかし、海老名と植村との間には、キリスト教思想における二つの異なる罪理解の伝統が確認されるべきであろう。

「吾人は罪悪ある故に基督と同一の意識を有すべからず」。「基督がもし予を全く罪悪より救ひ出す力なく、又従つて其高明なる意識を予に頒與することを肯ぜざるなれば、基督最早予の救主ではない」、「吾人若し基督に於て絶対的救済、即ち神子たるの意識を完成すること能はざるならば、吾人は実に信頼すべからざるものを信頼するのである」、「予は決して基督の吾人を欺かざるを信ずる。吾人は基督に於ける吾人の希望が恥辱とならざるを知る。」

**（３）近代日本と日本キリスト教の歴史的連関から見た論争**

以上、海老名と植村の論争を二つの論点において整理してきたが、そこからわかることは、海老名も植村も、キリスト教思想一般のレベルで論争を行っていること、またこの論争が日本における特殊な議論ではないという自覚においてなされていることである。こうした点から見れば、このキリスト論論争のどこに日本の状況と関わりが存在しているのか、といった疑問が生じるであろう。この日本の状況（近代日本の歴史的連関）との関わりを明確にするには、この論争が置かれた歴史的文脈、その背景へと目を向ける必要がある。論争をその発端あるいはその背景から見るとき、論争の状況性・歴史性、つまり日本の状況との関わりが明らかになるように思われる。アジア・キリスト教におけるアジアが歴史的概念であったのと同様に、「日本」も歴史的概念であり、日本の近代化という歴史的連関が日本のキリスト教（キリシタンの禁教解除を含めて）を基本的に規定している点に留意しなければならない。

明治日本の国家形成は、当初より、欧米型の議会制立憲体制による近代国家と天皇を中心とする国民国家という二つの必ずしも相互に整合しない原理に基づいて進められた。キリスト教は、欧米型の近代国家に適合した宗教として受け入れられ、明治初期から明治 23、24 年頃まで、「順風に帆をあげて滑り出した船のように、全体的にみて日本の教会の展開はまことに好調そのものであった」（大内三郎・海老沢有道　『日本キリスト教史』日本キリスト教団出版局　1970年、192頁）。「「教会」にたいするいやがらせや伝道妨害などは日常茶飯事であった。しかしそれを支えている当時の邪教観はいわば感情的、断片的なものであり、とくにキリスト教にたいして深刻な影響をあたえるほどではなかった。そして逆にキリスト教はそれにもまして多くのひとびとに歓迎され、教会はいちじるしい増加をみたのであった」（ibid.,　p.194）。しかし、「明治二十年代に入って明治国家の基礎が整備強化されてくると、やがてキリスト教にたいする制圧現象が現われてくる。それは、この明治国家を道徳的にその内側から支えるため明治二十三年渙発された教育勅語の国民道徳大系が、キリスト教の倫理と根本的に異なるだけでなく、前者は後者を否定し、したがって国民道徳体系を危くするものだというのである」（ibid.,　p.280）。「内村不敬事件」（明治 24 年）、井上哲次郎の談話をめぐる「教育と宗教との衝突事件」（明治 25-26 年）は、このキリスト教を取り巻く歴史的状況の変化を象徴的に示すものであり、「いきおいキリスト教会に道を求めるものも前のように多くなく減少してくる。かくして統計にみられるように、明治二十年代に入って教会の教勢はふるわず、その活動は沈滞気味に陥った」（ibid.,　p.296）。つまり、明治日本の国家形成は、明治 20 年代以降、天皇を中心とした国民国家という原理を鮮明にしつつ、日露戦争、日韓併合へと進んでゆくことになるのであり、こうした日本の保守化の動きは、明治日本のキリスト教のあり方を大きく規定するものとなった。海老名－植村のキリスト論論争を規定する日本の状況は、こうした歴史的連関の中に存在するのである。

明治 20 年代以降のキリスト教会への国家主義的な圧力の強化に伴った教勢不振（停滞期）の状況は、キリスト教界内部における問題とも重なりつつ、キリスト論論争の舞台を作り上げることになる。一つは、日本基督一致教会と日本組合基督教会との合同問題の挫折と、もう一つは新神学問題である。

日本のプロテスタント教会は、宣教の当初から合同教会形成への方向性を有していたが、両教会の「合同問題の気運」は明治 16 年の全国基督信徒大親睦会ごろから生まれ、具体

的な合同の作業が明治 19 年から進められた(inid., pp.229-240)。しかし、新島襄ら組合教会側の反対によって、この合同は不首尾に終わり、これは後の日本キリスト教史に大きなしこりを残すことになった。こうした中、明治 23 年になると、組合教会のなかに「新神学」についての議論が高まり、新神学の側に立つ金森通倫らとそれを論駁しようとする植村正久や小崎弘道らとの間での論争に至った。新神学は、「何よりもまず聖書釈義に関する方法が厳密な歴史的批判的方法であること」(ibid., p.325)を主張するものであるが、これが、すでに見た海老名と植村の論争の争点に直接関わるものであることは明らかであろう。つまり、海老名と植村の論争は、「内容からすると「新神学問題」の延長」(ibid., p.341)と見ることが可能なのである。この新神学問題によって、「なかには信仰に懐疑を抱き、教界を去る者も出たといわれるが、それはナイーブな信仰理解が、この派のもたらした聖書の歴史的批評学によって動揺をきたしたためであったと言われる」(鵜沼裕子 『史料による日本キリスト教史』聖学院大学出版会 1992年、36頁)。

こうしたキリスト教界内部の状況は、キリスト教界の体制の立て直しを迫ることになる。「日本組合教会は「新神学」に一番影響をうけ打撃を蒙っただけに、これに対処してその打撃を最小限度に防ぎ陣営を整備する必要に迫られた。明治二十四年四月組合教会は岡山に組合総会を開き、「信仰告白」を議定する案がなされた」(大内[1970], p.336)。合同問題の挫折(→教派教会としての立場の明確化の必要性)と新神学問題は、組合教会と一致教会双方において、信仰告白、信条の明確化という課題を突きつけたのである。「日本基督一致教会もまた明治二十三年十二月東京に大会を開いて、翌二十四年より名称を変更し再出発をはかった」とき、「もっとも先に重要問題として浮かび上がってきたのは信条問題であった」(ibid., p.338)。

以上が、海老名－植村のキリスト論論争の歴史的背景であるが、この論争と背景との関わりについて、要点を確認しておこう。このキリスト論論争の発端となった植村論文は、福音同盟会の大挙伝道における信仰告白の一致を問題としたものであるが、大挙伝道とは、当時のキリスト教界が直面した明治日本の国家主義台頭・保守化の圧力と内部における問題(合同問題の挫折と新神学問題)に対処することを目指したものであった。「明治二十年代にはいると、俄然反キリスト教的な国家主義との対立や「新神学問題」などによって大きな壁にぶつかったまま前進できず、教勢も停頓しがちであった。そこでそれを打開し、新しい二十世紀の精神としてキリスト教を顕揚し発展への活路を開く、ここに大伝道を展開しようとしたのである」(ibid., p.342)。すなわち、明治 20 年代における日本の状況において内外共に大きな壁に突き当たったキリスト教界がそれに対処しようとした起死回生の試みが、教派的な不一致を超えた大挙伝道だったのである。植村自身は、教派の合同に積極的な立場であったが、彼の論文の論点は、もし福音同盟会が真に教派の相違を超えた伝道を推進しようとするならば、信仰告白における一致がその前提であるというものであり、これは、まさに植村が日本基督教会における「信条問題」として取り組んでいた事柄だったのである。こうして、海老名－植村の論争は、信条、信仰告白の内容をめぐって始められ、その過程で近代聖書学(歴史的批判的方法による聖書批評＝高等批評)と伝統的教理との関係という問題を争点とすることになったのである。

海老名－植村のキリスト論論争については、その論争内容自体を見るだけでは、明治日本のキリスト教が置かれた状況との関わりは捉えにくいかもしれないが、その背景と発端

が二人に要求したものと論争の争点との緊密な結びつきを見るとき、論争の状況性は明確に理解できるものと思われる。まさに、近代化をめざす明治日本の歴史的連関が、キリスト教のあり方を大きく規定していたのであり、海老名と植村の論争もこうした文脈に位置することを念頭に理解されねばならないのである。

最後に、論争を規定する近代日本の状況という点に関して、もう一つのポイントを補足しておきたい。それは、明治日本のキリスト教徒における儒教的背景という問題である。明治日本のキリスト教に関しては、その代表的な指導者に旧武士階級の出身者が多く、彼らのキリスト教思想には儒教的教養が反映していることがしばしば指摘されてきた。もちろん、儒教的教養といっても簡単に単純化できるものではなく、個々の場合に応じた議論が必要であるが、本論文で取り上げている海老名弾正と植村正久についても、儒教との関わりは問題であり、海老名－植村論争の歴史的連関を論じる際にも無視することはできない。たとえば、土肥昭夫は『歴史と証言』（教文館　2004年）において、この論争を取り上げる中で（244-250頁）、両者に関して次のように論じている。

「海老名の見解は、イエス・キリストを神の一回的な独自な啓示とするキリスト教の伝統的教説と一致しない。その原因は、彼の神学が儒教的思惟方法によって著しく限定されていたからである、と思われる。儒教においては、上帝（神）即自然の物理（理気の結合）は人倫の道理（五倫五常の道）として連続的にとらえられている。このような自然主義が海老名の考え方の中に生きていた。彼は父子有親を万物の理と考え、これが神、イエス・キリスト、人間を貫く宗教的意識として存在する、と考えた。したがって、神のキリストにおける歴史的啓示はその独自性を解消し、人間一般の道理として合理化されてしまった。したがって、イエス・キリストは神ではなく、万物に遍在する神の理を宿す人間の宗教的意識を明らかにし、神との合一を実現した宗教的人間の極地となったのである」(ibid., 247)。

また、植村正久も「基督と其の事業」（④10）で海老名の見解を批判しつつ、自らの立場を積極的に提示しようとしているが、その中で儒教の有用性を唱えている。[8] すなわち、「彼が男女の序列関係を唱えたパウロの教えを当然とし、それを基礎とし、儒教の孝道の教えを援用して父なる神とキリストの関係をこのように述べていくと、その論理は両者を同類としつつその従属関係を唱えたオリゲネス派の従属説(Subordinationism)とあまり変わらないことになってしまう」(ibid, p.249)。

以上のように、海老名と植村において、神とキリストと人間という三位一体論やキリスト論を論じる中に儒教的な思惟方法や論理が入り込んでいるとするならば、両者のキリスト論論争は、こうした思考方法や論理のレベルにおいて、明確に欧米の近代キリスト教思想史の文脈に立ちつつも、同時に日本の歴史的連関に位置づけられねばならないと言えよう。

### （４）相関論から見た論争の評価

神学の場合に限らず、思想論争についての決着を評価することは単純な問題ではない。海老名と植村に関して、両者の議論とその結末はいかに評価するできるのであろうか。こ

の論争について勝者を語ることはできるのであろうか。

「方法論の相違のため、両者の論争は結局かみあわず。それぞれが自説を唱えて他を批判攻撃することに終始してしまったのである。さらに不幸なことは、この論争を背景とした第一一回福音同盟大会(1902・4)の決議とその後の動向であった」(ibis., p.250)

この土肥の論評は的確に問題点を突いている。論争自体を見るとき、そこには両者の駆け引きばかりが目立ち、建設的な思想構築が見られない、つまり不毛な論争という印象が強く ── もちろん、論争の過程で、海老名弾正「三位一体の教義と予が宗教的意識」と植村正久「基督の其の事業」という二つの神学論文が書かれた点に、論争の積極的意義を見ることもできるかもしれない ── 、また、福音同盟大会における決議に関しても、問題点が指摘されねばならないであろう。確かに、福音同盟会における信仰告白という点をめぐって開始された論争が、植村の立場を認める決議で決着したわけであるから、一応、この論争について植村の勝利と解することは可能である。しかし、「これらのことによって彼は安部磯雄、松村介石、島田三郎、木下尚江、巌本善治、押川方義といった多くの教界関係者より理解と協力を得た。彼の教会もこの論争のその結末によってかえって伸張した」(ibid., p.326)。論争が論争としてかみ合わぬまま終始したこと、一応の植村の勝利も実際には海老名にとって打撃とならなかったこと、こうした点から見るならば、キリスト論論争は植村の勝利で終わったとは必ずしも言えないであろう。

おそらく、海老名－植村論争を評価する際の重要なポイントは、この論争が二つの歴史的連関において、いわば必然的に発生したという点にあるように思われる。近代キリスト教思想の連関から言えば、海老名－植村論争は、近代のキリスト教が不可避的に取り組まざるをえない普遍的な問題であり、まさにそうしたキリスト教の普遍的問題に関わる典型的論争と言える。また、明治日本の歴史的状況において見ても、日本の近代化において明治 20 年代にキリスト教界の内外から生じた問題状況が、この論争に結実したことは明らかであって、以上の二つの歴史的連関の相関において、このキリスト論論争は存在しているのである。したがって、論争の評価は、この相関という観点からなされねばならないであろう。

二つの歴史的連関の遭遇は、その後どのような展開をたどったのであろうか。欧米における近代化（→近代的合理主義と伝統的信仰との対立）と日本の近代化（天皇中心の国民国家・国家主義の台頭）とは、その後の日本においては、とくに日本のキリスト教会にとってはきわめて不幸な展開を示すことになる。つまり、明治期後半から顕著になった国家主義は、第二次世界大戦と敗戦へと進んでゆき、日本の内外のキリスト教は大きな苦難を経験する。その分かれ目が、海老名－植村論争に焦点を結んだ日本のキリスト教界の選択にあったというのは決して不当な歴史の深読みではないように思われる。というのも、この論争で問われていたのは、日本のキリスト教が国家主義の台頭という状況に対して、いかにキリスト教会の信仰的基盤（信仰告白と信条）を確立するのかという問題であったにもかかわらず、この論争の不毛さにも見られるように、明治のキリスト教界は自らの基盤を確立できないまま、天皇制国家主義の潮流に巻き込まれて行くことになるからである。もちろん、過ぎ去った歴史に対して、「もし……であったら」という議論 ── 海老名と植

村に代表される二つの方向へとキリスト教界が解体しなければ、明治日本において、別のより適切なキリスト教の文脈化が可能であったかもしれない、など ── をしても意味がないという見解はもっともではあるが、このキリスト論論争における「状況とメッセージの相関」が示唆する諸問題 ── 近代世界とキリスト教、国家とキリスト教といった問題 ── は、現代日本のキリスト教思想にとっても共有すべき普遍性を有しており、明治のキリスト教がこの相関をいかなる仕方で遂行したかについては学ぶべき点が多くあるものと思われる。

以上、アジア・キリスト教思想研究について、第３章で論じられた研究の視点と方法を海老名－植村論争に適応することが試みられた。もちろん、こうした議論がアジア・キリスト教思想研究の新しい構築に対して何を付け加え得たかについての評価は、読者に委ねなければならない。今後、様々な事例への適応を試みる中で、方法論のさらなる精密化を行いたい。

## 注

(1) 本論文で参照される海老名－植村論争についての基本文献は、下記のものである。
『植村正久と其の時代』五、243-333頁
『基督論集－海老名氏の基督論及び諸家の批判文』警醒社書店、1902年、83-180頁
なお、これらの文献からの引用は、一部現代表記に改めて行われた。

(2) 本論文で扱われた論争の波及（⑤）としては、『基督論集－海老名氏の基督論及び諸家の批判文』に所収の以下の文献に限定されている。
三並良「基督に関する論争を読む」（1902.2.1『新人』第二巻第七号）
三並良「福音新報記者の基督論」(1902.3.1『新人』第二巻第八号）
小崎弘道「海老名弾正氏の三位一体論を読む」
（1902.1.7-2.7『東京毎週新誌』960-963号）
アルブレクト「基督教的意識と神に関する三位一体の教義」
（1902.2.21-3.7『東京毎週新誌』965-967号）
高木壬太郎「海老名弾正氏の三位一体論」（1902.1.18-3.22『護教』547-556）

(3) すれ違う論争

１．植村正久「海老名弾正君に答ふ」（1901.10.9　『福音新報』328号）
植村は、論争に閉口すると言いつつも、論争を有利に進めることを念頭に言葉を選んでいる。自らの信仰は「歴史的の信仰」「基督教徒の歴史的に継承し来れる信仰」であって、その論理的哲学的な問題はすでに十分議論を経たもの（御質問は無用）である。
キリストは人となりし神であり、礼拝と祈祷の対象。「今更の様に難題がましく御質問あるが了解致し兼ね候」、むしろ「無信の哲学生」のような口ぶりに対しては、「不審なるは貴殿の立場にて候」。

２．海老名弾正「植村氏の答書を読む」（1901.11.1　『新人』第二巻第四号）
植村が自分の質問に直接答えないのに対して、まず非難する。

「恰も洗礼志願者の入会試験でもしらるるが如き口調」「「歴史的に継承せる信仰」の法位」「討究や論戦で以て真理を発揮することは到底植村氏は臨まれないやうに思われる。」「霊界の宣戦を現出するには至られまい。」「自称正統派の取りたる態度」「若し我国の固陋なる忠君愛国の唱道者に、其忠君愛国の内容如何と問ふたならばドーだろう。不忠不敬の宣告は直に其口から下されるであろう。今日の宗教界また比類の人に乏しくない。」「予は同氏に其信仰の表白を請求したのではない。其仰々しく発表せられたる信条の内容を聞かんが為に質疑を発したのである。之を主張するを以て其主義とする所の植村氏は其内容の質問に答ふる義務はないのであろうか。氏が一言を以て之れに及ぶものなくして却つて予に信仰の表白を勧告せらるるは、氏の其信条を主張せらるるやただの独断的であるとの意味であるか。ああ予は最早多くをいふまい、しかも遂に此等意外の言を以て今回の局を結ばねばならぬに至つたことを深く限りなく遺憾とするものである。」

(4) ハルナック－バルト論争との違いは、基本的には 20 世紀初頭におけるドイツと日本における自由主義神学の確立度・定着度の違いと言える。

(5) ロゴス論の成立をめぐる教理史的問題、ハルナックのヘレニズム化の問題

福音新報社説「海老名弾正氏の告白を紹介す」（1902.1.8『福音新報』341号）

「初代基督教徒の信仰が当時のロゴス説に由来すと做すは一個の臆断に過ぎず。」「当時の基督教徒は思弁的に研究して、神と人とを結び付くる基督を先ずロゴスとし、次ぎに之を以て神其ものとし終に化身説を案出せりとは何分も余輩の合点し難きところなり。」「先つ基督に祈り且つ神事したるよりロゴス論も化身説も其の自然の結果として発生しき来れるに非ずや」「進化論者の迷妄を連想せざるを得ず。」

「基督の言を適当に解釈すれば、之を神と見る外なきもの甚だ多し。」「当時の信徒のみに非ず、世々の基督教徒の実験するところ斯くの如し。」

「其の発見せる基督は如何なるものや」

新人社説「福音新報の紹介文を読む」（1902.2.1『新人』第二巻第七号）

「公平なる紹介にあらずして、むしろ一種の偏見に以てせる一箇の批判文なるを発見す。しかして其紹介せられし所、間々原文の意を誤り伝へ、時に或は全く正反対に出つること」。

この海老名のコメント自体の正当性は、海老名の元々の文章と植村による紹介を比較することによって確認できる。

「此意見を有する著名の学者は決して一人にあらず。」　ハルナック、ヴァイスら

「基教徒の信仰が、ロゴス説に由来すとは、誰あつてか之を信ぜん、クリスャンの信仰はキリストを信ずるにあり、其のフィロー哲学を信ずるより起りしにあらざるや、固より明けし。されど記者の所謂初代クリスチャンの信仰てふ意をして、基督教徒信仰の教義を意味せしめば、そが当時のフィロー哲学に由来するといふも、決して臆断といふべからず。」「歴山府哲学の影響の痕跡あるや、誰が眼にも歴々として疑ふべからざるなり。」

「記者曰く、海老名氏のいはるる如く、当時の基督教徒は、思弁的に研究して、神と人とを結びつけるキリストを先づロゴスとし、次に之を以て神其物となし、終に化身論を案出せりとは、何分にも予輩の合点しがかき所なりと。これは誤れる紹介なり。」

(6) 海老名と植村における論争に含まれたの聖書学的諸問題については、イエスのメシア意識（メシアの秘密）をめぐる議論からもわかるように、簡単に決着できるわけではない。実際、シュトゥールマッハーと清水とを比べてわかるように、基本的な問題は未決着と言わざるを得ない。

(7) ＜罪理解に関して＞

海老名弾正「諸批判を読んで再び予が基督観を明にす」

（1902.4.1『新人』第二巻第九号）

「批評者の間に互に相撞着したる所あり、又予が意見に対して正反対の見解を下したるなどもあつて中々の奇観を呈して居る。」

「福音新報と毎週新誌とは予が宗教観に罪悪の要素が看過せられてあると極論したが、予は寧ろ彼等に罪悪の本城に切り入つたる実験ありや否やを疑わざるをえない。予が実験によれば罪悪の根拠は吾人の主我主義に存する。」「記者たちは罪悪てふ文字のなき故に、予が論文中に罪悪の意識が見えぬと断案を下されたのであろうか。これは極めて浅薄の見解である。予は罪悪々々と喋々する人々が、其枝葉を刈除することに汲々として、短刀直入其根幹に及ばざる感あるを見る。」

「アルブレクト教授」。「吾人固より一個の自己意識のみを根拠とはせぬ。是れ予が論文の全部を見ればよく分る筈である。吾人は教授が公同教会を云々せらるるを驚かざるを得ない。教授をして宗教改革の当代にあらしめたならば、ルーテルに賛同せずして、定めて公同教会の代表たりしエックやテッゼルなどと握手せられたであろう。」

「聖霊の説明」「社会精神」「元気」。「霊といふ文字すら一時は幽霊を連想したこともある。使用しなれぬ文字を－其内容も示さずして－挿入するほどノンセンス、且つアブサードなことはない。」

＜海老名と日本思想との関わりに関して＞

海老名の三位一体論に対しては、植村らによって「社会精神」「元気」という聖霊理解に対して批判がなされているが、これは、海老名における日本思想の背景として論じることも可能である。

植村「彼我相違の点を明らかにす」

「日本魂の如くなる基督魂てふ遺風余響のみ伝はりて世を刺激し社会を感化しつつあるを信ぜざる」「基督の道は決して其の如きものに非るなり。」「海老名氏は時代精神に重きを置る。」「余輩は基督教の歴史的発展を認むるといへども、其の信仰は天より出でたりと確信す。余輩は時代精神よりも神の作用に重きを置く。」「海老名氏は基督に学ぶを重んぜらるる。余輩は生死ともに之を信じ、之と結び、之に依り、之に一任するを尚ぶ。」

(8)土肥は、植村のこの論考について、次のように論評している。

自由主義神学的なイエス伝研究を極力警戒。その論述は学問的業績というよりも、「建徳的弁証論の性質を帯びて綴られ」た。当時の日本の教会の状況を考えるならば、その説明は当を得ている。